
蜻蛉（とんぼ）

橋本 直

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

蜻蛉^{とんぼ}

【コード】

N1885E

【作者名】

橋本 直

【あらすじ】

少年良雄は田舎の村にやってきた。彼は奇妙な少年タロウに出会い、不思議な体験をする。

ある田舎の村で

子供はゆつくりと流れていく時間を過ごす為の、不思議な秘法を持っているものだ。

良雄も、大人達が墓参りに行き、誰も居なくなつた祖母の住んでいた萱葺きの大屋根の下、一人、迷い込んできた蜻蛉を追つた。蜻蛉は良雄の手の届かない、大黒柱の上のほう、仏壇の上、土間の天井のはりなどに、止まっては、ひうひうとまたべつのところへ移つていく。良雄は蜻蛉の後を追ひ、そのひうひうに見とれていた。

昼を過ぎていくというのに、大人達は帰つてこなかった。それでも、暗い萱葺きの大屋根の下、一人、良雄は蜻蛉を追ひ続けた。彼は空腹を感じることがあれば、大人達の残した煎餅や落花生でその腹を満たした。

秋の午後、萱葺きの大屋根の下をひゆうと吹く風があつた。蜻蛉は太い大黒柱からぱつと飛び立つた。それは風に流され、庭の方まで飛んでいった。

庭に流された蜻蛉は、ふっと空に舞い上がった。良雄はそれを追つた。軒下まで走つて、裸足で庭に飛び降りて。蜻蛉は実をいつぱいにつけた柿の木を越えて、ずっと、ずっと、遠くまで飛んでいってしまうまで。良雄は空のその一点を見つめていた。

良雄は何も見えはしない、秋の晴れ上がった空をしばらく見つめてから、足元に転がっている水色の運動靴を履いた。

蜻蛉を見失つた今、良雄の不安定で落ちつかない視線が、大きな柿の木の後ろに何かをみつけた。それは彼にとって極めて奇妙なものだつた。そこには青い緋の文様の着物を身につけた、彼と同じくらしい年頃の少年。柿の木の陰でじつとこちらを覗つていた。良雄が気付いたことを知つたのか、大木の陰からできた少年は、はじめは不安そうな顔をしていたが、良雄が笑いかけると、ニッコリ笑つて、

「鬼はいないみたいだね」

緋の着物という姿、鬼がいるかと聞く、良雄はとても不思議に思った。

「鬼なんているわけないじゃないか」

「それもそうだね」

今、良雄の前に立ったそれは見れば見るほど奇妙な格好だった。

緋の着物に紺色の帯、しかもその着物のあちらこちらに点々と継ぎ当てががしてある。垢で汚れた草履は彼には少し大きすぎるらしく歩く度に草履が脱げそうになる。

「君、良雄君だね」

少年は良雄の名を知っていた。良雄はなぜかそのことを不思議に思わなかった。それは至極当然のことに思えた。

少年はてれるような、おびえるような顔をしながら良雄を見つめていた。

「きみの名前はなんていうの、教えてよ」

少年は一瞬の躊躇の後、

「タロウ」

もぞもぞと呟く。

良雄は少年の眼差しに、奇妙な何かを見つけた。それは懐かしい、見慣れた何かだった。

「家に来ないか、食うもんがいっぱいあるぜ」

良雄はタロウの手を掴んで、家の中につれて行こうとした。しかしタロウはその手を振りほどくと、門の外へと駆け出した。

訳もわからず、良雄は少年の影を追った。

ある田舎の村で 2

「何処に行くんだい」

息を切らし、半べそをかきながらも、良雄は蜻蛉を追った時のように走り続けた。その好奇と、孤独が、彼を走らせていた。

ようやくタロウの背に手が届く位の所まで近づいた時、急にタロウは振り返った。

「池だよ、タガメがいるんだ、君はタガメなんか見たことなんかないんだろ」

また凶星である。良雄は、団地生まれの団地育ち、生まれてこの方、野生のタガメなど見たことはなかった。いつもの鈍い足取りが、少し自分でも機敏になったような気がした。

門を出て、左に曲がり、そのまま道なりに切通しを抜け、畑の畦を越えて、林を突っ切った。そして道が行きどまると池があった。大きく青い池があった。二人はそのまま崖をすべりおりた。

タロウは、良雄の手を引いて、葦のしげみの中に入っていく。枯れた葦が積もった地面はスカスカで、濡れたスポンジの上を歩いているかのように、良雄の運動靴の底を濡らした。

しばらく歩くと、ようやくその池の水面が見えた。葦は、澄んだ水面から柱となつてつきだし、少年達の頭の遥か上まで伸びて、天空を支えていた。

良雄は葦の根元の枯れた水草の一つ一つにタガメの姿を探した。

「そんなところじゃないよ、ここだよ。ここ」

タロウは、水中の一点を指差した。そこには、一枚の大きな枯れ葉がまわりの落ち葉達にまぎれて、ひっそりと獲物を待っていた。

そのカマ、その目、良雄はじつとみつめていた。

そのとき、小鮒が一匹、枯れ葉の前を通った。

「食つぞ」

タロウがいった瞬間、ぱっと枯れ葉がカマをのばしたかと思うと、

小鮒は腹の皮を突き破られてた。それはカマから逃れようと、体を激しくくねらせた。しかしそれも枯れ葉がくちばしを突き刺すと、次第に力が抜けて行つた。

「吸血鬼だね」

良雄はそう呟いた。

その後二人は、池のまわりをあちこち走り回つた。流れ込む小川のせせらぎや、鋭く落ち込んだ深みの緑を、タロウは一つ一つ良雄に教えていった。そこには、タイコウチ、クチボソ、それにダボハゼといった見慣れた生き物に混じつて、タガメやゲンゴロウ、ミズカマキリやニゴイ、そういった彼には縁の無い虫や魚達が泳ぎまわつていた。

この池の力に彼は酔つていた。

しかし、その酔いも空腹という物理的な現象によつて打ち砕かれつつあつた。それを何処で悟つたのだろう、タロウが、

「俺んち、行こ。腹、減つたんだらう」

そう言つと、良雄の手を掴んで、池の後ろの土手を登り始めた。

いつの間にか太陽の光がオレンジ色に変わつて、走る良雄の頬を照らしていた。蟋蟀の音もまた良雄の耳を捉える。涼しい。

「蟋蟀だね」

「エンマだ」

良雄と少年は呟きあつた。タロウは足元の黒い虫を拾い上げた。

「ほら」

そう言つと、彼は捕まえた虫を良雄に見せた。虫はタロウの手から逃れようともがいた。

「知ってるよ、それ、共食いする虫だろ」

良雄は蟋蟀をじつと見つめた。

「捨てちゃえよ、そんな虫」

「うん」

そう言つと、タロウは手の中の虫を思いつきり林の中に投げ込んだ。

蜻蛉（とんぼ）

ある田舎の村で

そのまま丘を登りつめ、林を抜けた、良雄がこれまで来たことのないようなところにタロウの家はあった。大きな門をくぐって庭にはいると、そこは萱葺きの大屋根があった。良雄はタロウに導かれるまま家の中に入った。

すすけた天井、暗い土間、鈍く光る大黒柱。家に良雄は圧倒された。

「誰も居ないの」

良雄は震えながら尋ねた。

「そうだよ」

そう言うところタロウは台所から取って来た落花生を、良雄に手渡した。乾ききつた落花生を割ると、中から萎びて短い棒のようになった落花生の実がでてきた。良雄はそれをつまんで口の中に入れた。味らしい味は何もしなかった。ただ酸化しかかった脂肪特有のすっぱい匂いだけが口の中に広がった。

「帰りたいな」

良雄がそういったことには特に理由はなかった、ただ自分はここにはいるならないと言うような気がただけだ。黒く光る大黒柱も、屋根から吊るされた大根の干物も、線香の消えかけた仏壇も、どれもこれも枯れの存在を許しているように思えなかった。ここにはいるてはならない、それらのものはそう語っていた。

「ダメだよ」

タロウの厳しい声が、良雄の耳から心までを引き裂いた。

「君は帰ってはいけないんだ」

その声は天井に吸収されて行く、天井はタロウを憎んでいる。彼に刃向かっている。良雄はそう思った。そしてその瞬間彼は決意を固めた。

「ぼくは家に帰るんだ、家に帰るんだ」

良雄はその家を飛び出した。しがみつくタロウを振り解き、運動靴をはくと、庭に駆け出した。

庭を駆け抜けて、長屋門をくぐって、そのまま道なりに切通しを駆け抜けた。良雄は何かから逃げているみたいな気分になった。それはタロウなんかじゃない、もつと大きなものだ。しかし逃げ切れるだろう、あの家の天井が見守っていてくれる。良雄が考えることができたのはそれだけだった。ただ闇雲に足の向くまま走り続けた。息がきれはじめるほどに駆けて、養豚場の真木の生け垣がみえはじめたところでようやく安心して息をついた。豚の悲鳴のような鳴き声と堆肥の匂いの他は、何も生き物の気配を感じることはなかった。もはやここまでではタロウも追ってこれない、なぜかそういう気がした。

良雄は辺りを見回した。太陽は西に傾きかけ、オレンジ色の血で空を染めていた。彼は周りの風景を見渡してはじめて、ここが彼の伯母さんの家の近くであることを知った。ちょうど彼の家族がここに来るときに止めた彼の家の白い軽自動車も見える。彼はもはや孤独ではない、ようやく本当の人間に会える。彼は豚の悲鳴を聞きながら伯母さんの家に近づいていった。

彼は自分の家の軽乗用車の横をすり抜けると門扉を開けた。庭には人影はなく、彼の家の者も戻ってきてはいなかった。彼は誰かが来るのを待つつもりで縁側に腰掛けて、庭越しに見える黒い森の影を眺めていた。吸い込まれるようなその森の下草の陰の色が、少し紫がかって見えた。

軽い疲れから彼は靴を脱いで、縁側に横になった。天井裏に一匹の蜻蛉が止まっていた。良雄はそれに構う気もなく目を瞑ろうとした。

「ここに居たのか。ちょっと探したんだぜ、まったく手間を取らせ
るね、君は」

良雄は驚いて起き上がろうとした、しかし身体が言うことを聞かなかった。

縁側の側、立っていたのはタロウだった。草履を履いていないのはたぶん彼をすぐに追いかけてきたからだろう、肩で息をしながら冷たい眼で良雄を見つめていた。

良雄は首を振った。タロウの眼が普通でないのはすぐに判った。その眼は良雄を見てはいなかった。タロウはおびえていた。そして彼は何かたくらんでいた。良雄は震えながら伸びてくるタロウの手を跳ね除けると、タロウを突き飛ばして走り出した。

ある田舎の村で

「待てよ、待ってくれよ」

良雄は何が起きても走り続ける気でいた。タロウの哀願する声が聞こえるが、そんなものはもうどうでもよかった。半開きの門扉を勢いよく押し開け、剥き出しの肘が真木の枝に傷つくのも気にせず、砂利道の石ころを踏みしだいて彼は走った。

道の両脇、杉林の暗がりでは蟋蟀が鳴いていた。後ろを振り返ると、必死の形相でタロウが追ってきていた。僕は喰われるのだろうか、突然そんな気がした。なぜか分からないけれどタロウが僕を喰おうとしているんだという確信だけが蟋蟀の鳴き声のように良雄の身体の中で長く響き渡っていた。

道は寺の正面、左右に分かれていた。良雄は躊躇わずに国道の方へ足を向けた。どちらかと言えば国道の方に続く道の方が、人通りも多い。良雄は急な坂道を這うようにして登り始めた。

急に視界が開けた。そして同時に良雄の足が止まった。一本道に立ちふさがるあれは、一体なんだろう。良雄は目を凝らしてその巨大な生き物を眺めた。彼の目はまず、その巨体の上に突き立った頭に行った、大きな目玉に行った。ぼろぼろの布を腰に巻き付け、空を突き破るようなその背丈、毛むくじゃらでぶっとい手足、顔面から突き出た巨大な鼻。鼻の下には口髭が生え、その下に広がる大口から漏れる唸り声に良雄は思わず道端の木の影に隠れた。巨人はゆっくりとこちらに近づいてくる。良雄は我にかえってもと来た道を走り出した。坂を降りてきてもとの丁字路に戻ったとき、そこには顔全体で恐怖を現しているタロウがいた。タロウの目には良雄の後ろを走る巨人があった。

「おっ、鬼」

タロウがそう叫んだとき、鬼は突然飛び上がって良雄を軽く飛び越してタロウの前に立った。

「オマエハモハヤウズミダ」

それは右手を伸ばすとタロウの頭を掴みあげた。タロウは必死になつて手足を振り回してそれに抵抗するが、最初から勝負はついていた。巨人はもう一方の手でタロウの肩の辺りを押さえると、一息にタロウの首を引き抜いた。そして肩の辺りから吹き上げる血で喉を潤したあと、巨人はタロウの頭を口に入れた。小さな悲鳴のような音を立てながら、タロウの頭は砕けて消えた。

良雄は耐え切れずに目を瞑った。目を瞑っていても巨人がタロウを引き裂いては噛み砕く音は彼の耳の中に長く跡を引いた。

しばらくして、タロウを食べ尽くしたのか辺りは急に静かになった。良雄は恐る恐る目を開いた。巨人のいないことを確認すると、彼はゆっくりと巨人がタロウを喰った場所に出ていった。木屑が幾らか散らばっているだけで、血も肉片も巨人の涎も落ちてはいなかった。良雄は少し不思議に思いながらも祖母のいた家に向かって歩き出した。

急な坂を登り終えて祖母の家の前の道にでたとき、数台のトラックが彼の視界を遮った。トラックの荷台には乗せきれないほどの木屑を積んでいた。

門を入ると溢れた木屑が、庭中に敷き詰められ、祖母の家はもう大黒柱とおびただしい瓦の破片の他には何も残してはいなかった。辺りは埃を抑えるために撒かれた水があちこちで溜まって、それが夕陽に染まってさながら血だまりの様に見えた。

親戚中の大人達がその後片付けの様子を見ていた。彼の家族もその中に混じって運ばれていく家の残骸を見送っていた。

「おお、良雄。何処行つてたんだ。せつかくさつきパワーシヨベルが、家壊してるところだったのに、惜しかったな」

呆然と家の前に立つ良雄を見つけた彼の父親は何もなかったかのように良雄に言った。

良雄は崩れた家の破片を一切れ、トラックの荷台から引き抜くとそのままポケットにしまい込んだ。

蜻蛉（とんぼ）

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

PDF小説ネット発足にあたって

広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1885e/>

蜻蛉（とんぼ）

2009年3月24日09時33分発行